

ひきこもり・不登校等に関するアンケート 調査概要

令和4年10月

枚方市 子ども未来部

子ども青少年政策課・子どもの育ち見守り室子ども相談課

調査の実施方法

1) 調査スケジュール

- 令和4年 6月 アンケート調査票作成
7月 アンケート調査開始（調査票の配付・回収）
8月12日 回答締め切り

2) 調査の配付・回収

(ア) 配布：子ども未来部から各家族会の代表者に調査票と返信用封筒を配布し、会員に配付いただく。

(イ) 回収：下記①又は②にて回収

①各会員が返信用封筒にて、子ども青少年政策課に返送

②各会員がW e bで入力し、送信

3) 対象・設問内容：枚方市内で活動するひきこもり・不登校等の子どもを持つ家族会の会員（枚方市外の会員も含む）を対象に

I. 子ども（当事者）・家族について

II. 家族会について

III. 最後に

33個の設問で構成しています。

4) 記入方法

・別紙、アンケート調査票に直接記入する。W e b回答の場合は、チェックボックス等で入力する。答えは、当てはまる番号を○印で囲むか、数字を記入する。

・「その他」を答えた場合は、（ ）内に具体的な内容を記入する。

・回答に迷う場合は、回答者の気持ち、考えに近いものを選ぶ。

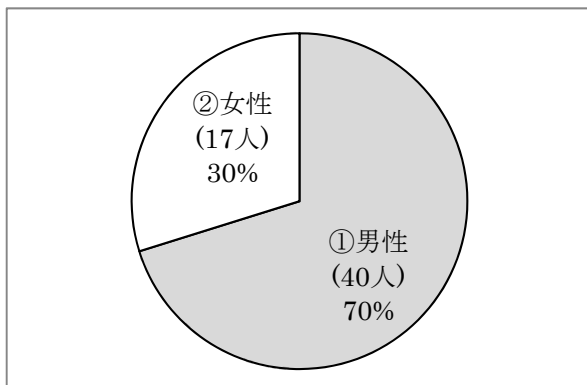
5) 配布・回収数

配布先	配布数	回収数	回収率
イシス大阪家族会 つばさの会大阪 登校拒否を克服する会・北河内交流会	132部	57部 (郵送55・W e b2)	43.2%

調査の結果

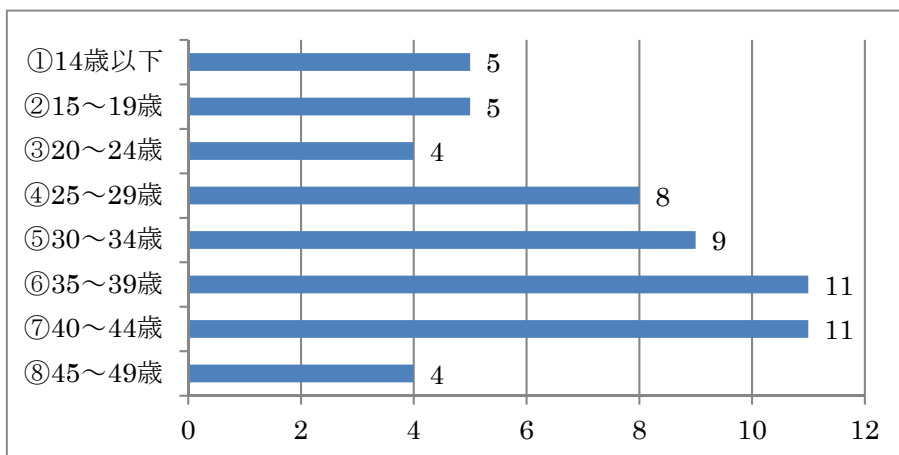
I. 子ども（当事者）・家族について

Q1 お子さん（当事者のこと。以下同じ。）の性別をお答えください。選択肢1・2で答えにくい場合は、3にご記入ください。



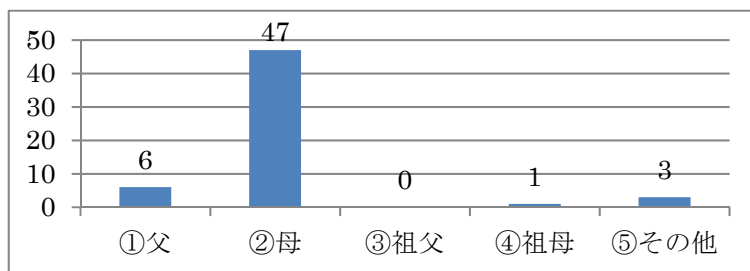
お子さんの性別については、男性が70%、女性が30%となっており、前回調査（平成29年度実施）と同様の傾向となっています。

Q2 お子さんの年齢をお答えください。



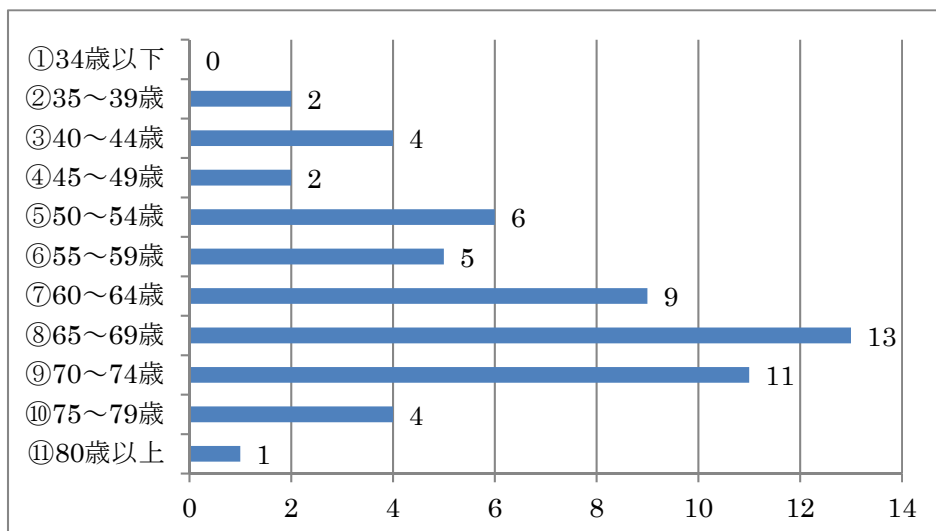
お子さんの年齢については、35～39歳、40～44歳がそれぞれ11人と最も多く、次いで、30～34歳が多くなっています。前回調査では25～29歳が最も多く、次いで、20～24歳、35～39歳の順に多くなっていました。

Q3 ご記入者のお子さんとの関係をお答えください。



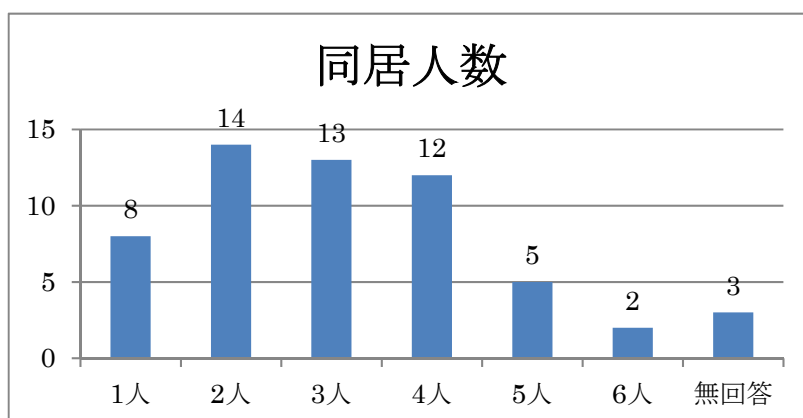
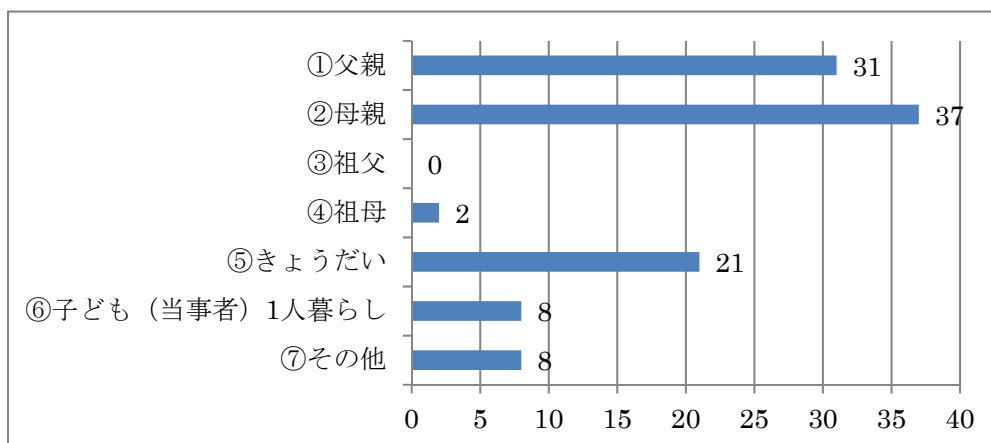
記入者については、母が最も多く、前回調査と同様の傾向となっています。

Q4 ご記入者の年齢をお教えてください。



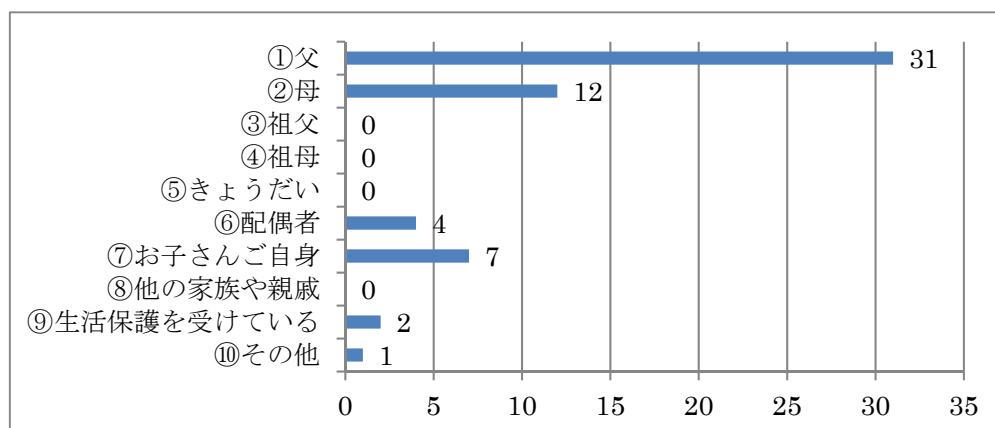
記入者の年齢については、65～69歳が13人と最も多く、次いで、70～74歳、60～64歳が多くなっています。前回調査では、55～59歳、65～69歳が最も多くなっていました。

Q5 お子さんと同居している家族を教えてください。また、お子さんも含めた同居人数を記入してください。



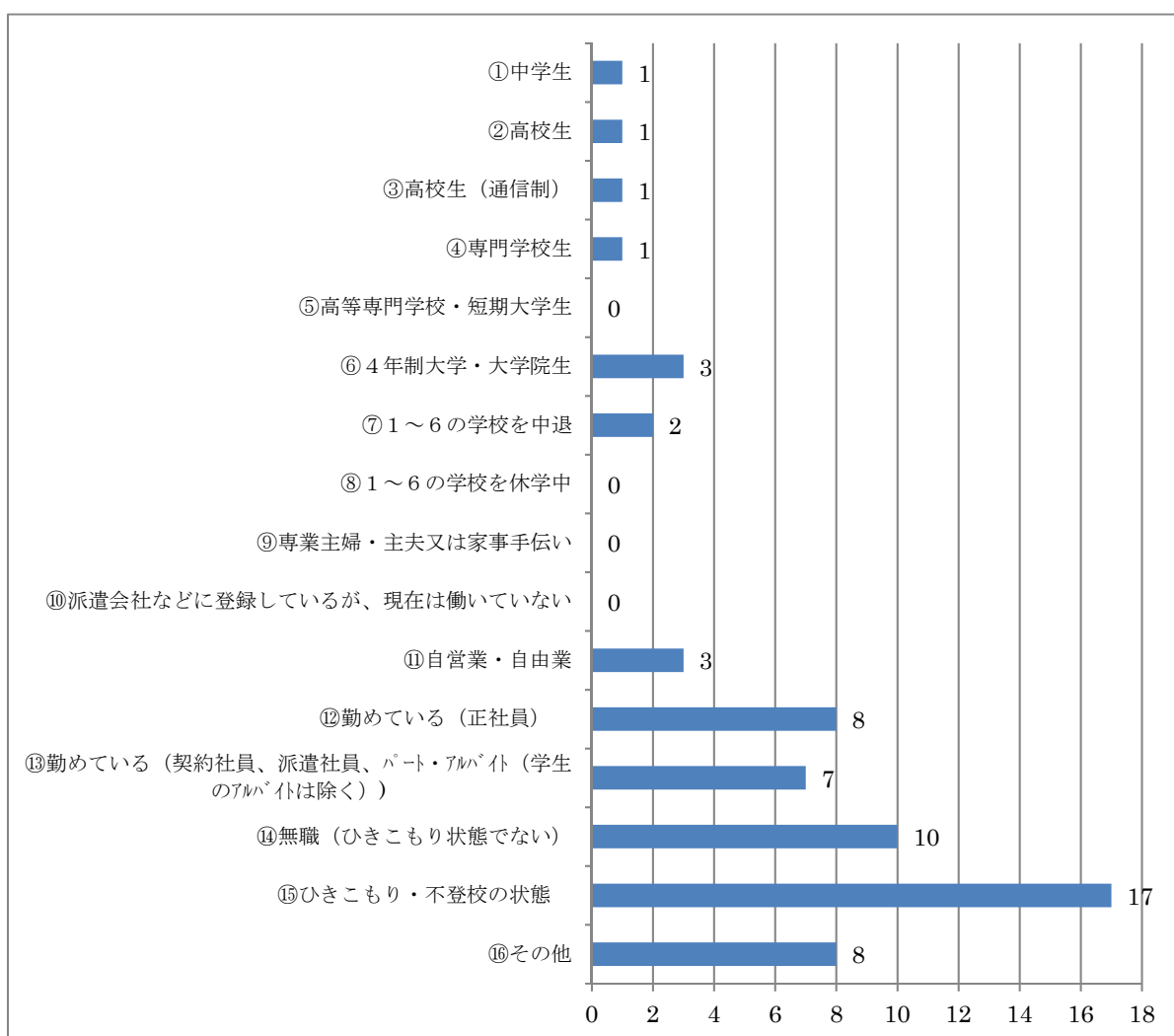
子どもと同居している家族は母親が最も多く、次いで父、きょうだいが多くなっており、同居人数は2～4人が多くなっています。前回調査とほぼ同様の傾向となっています。

Q6 お子さんの家の生計を支えているのは主にお子さんから見てどなたですか。生計を立てている方が複数いる場合は、最も多く家計を負担している方をお教えてください。また、主に仕送りで生計を立てている方は、その仕送りを主にしてくれている人をお教えてください。(〇はひとつだけ)



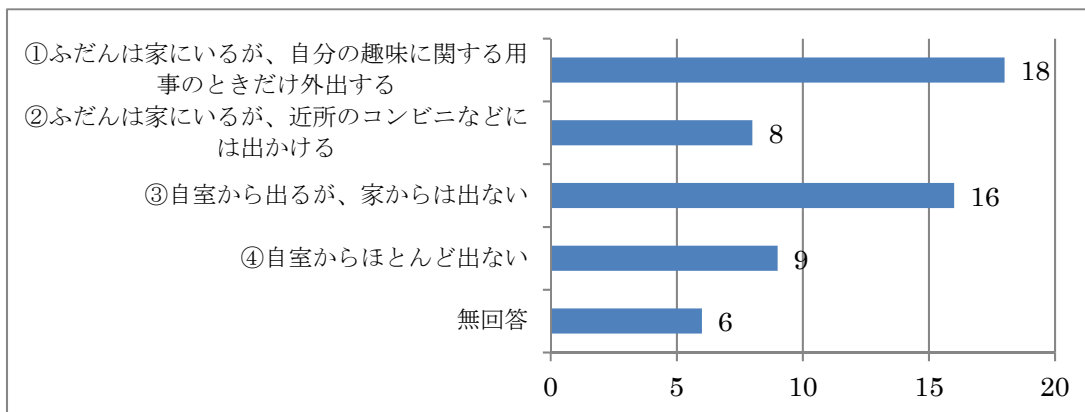
家計を支えているのは、父が最も多く、次いで母、子ども自身の順に多くなっています。前回調査とほぼ同様の傾向となっています。

Q7 お子さんの現在の状況をご記入ください。(〇はいくつでも)



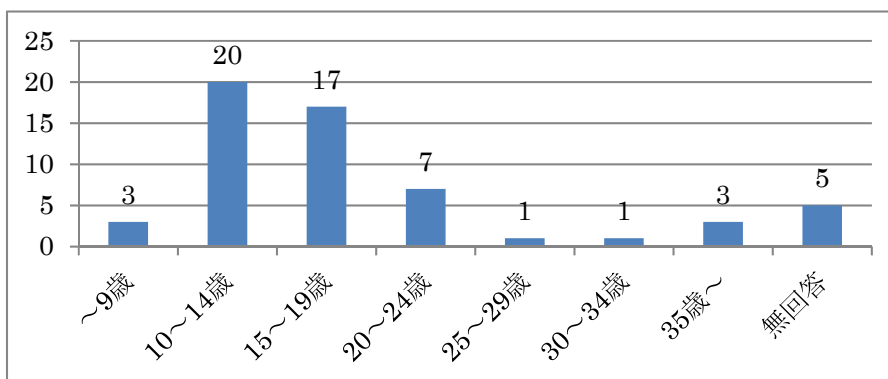
子どもの現在の状況は、「ひきこもり・不登校の状態」が最も多く、次いで、「無職 (ひきこもりでない)」、「勤めている (正社員)」の順に多くなっています。前回調査とほぼ同様の傾向となっています。

Q8 お子さんの、ひきこもりや不登校の当初の状態は、以下のどれにあたりますか。(〇はひとつだけ。)



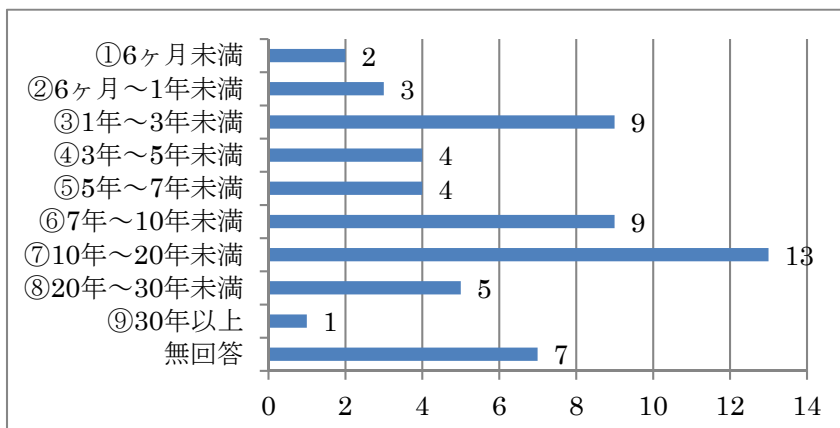
子どもの、ひきこもりや不登校の当初の状態は、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」が最も多く、次いで「自室から出るが、家からは出ない」が多くなっています。前回調査とほぼ同様の傾向となっています。

Q9 ひきこもりの状態になったのは、お子さんが何歳の頃ですか。(数字で具体的に) (現在、不登校の状態の場合は、Q11へお進みください。)



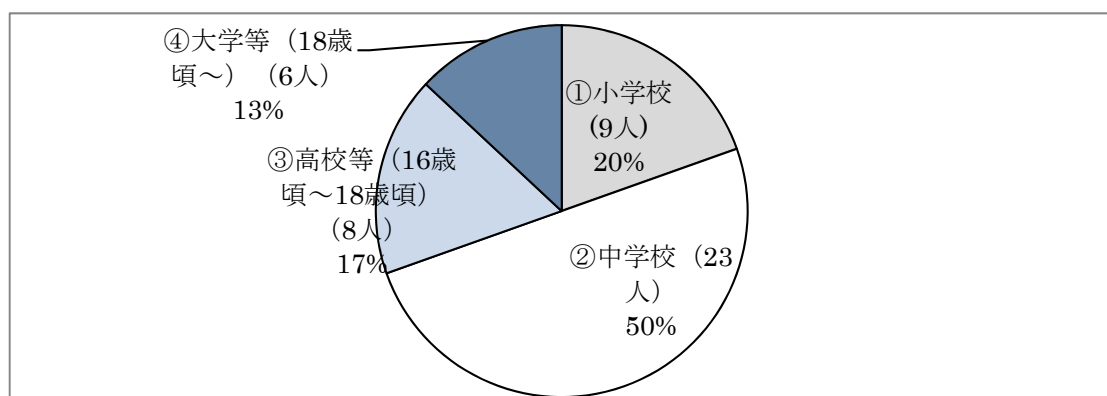
ひきこもりの状態になった年齢は、10~14歳の頃が最も多く、次いで15~19歳の頃、20~24歳の頃が多くなっています。前回調査とほぼ同様の傾向となっています。

Q10 その状態はどれくらい続きましたか。(〇はひとつだけ)



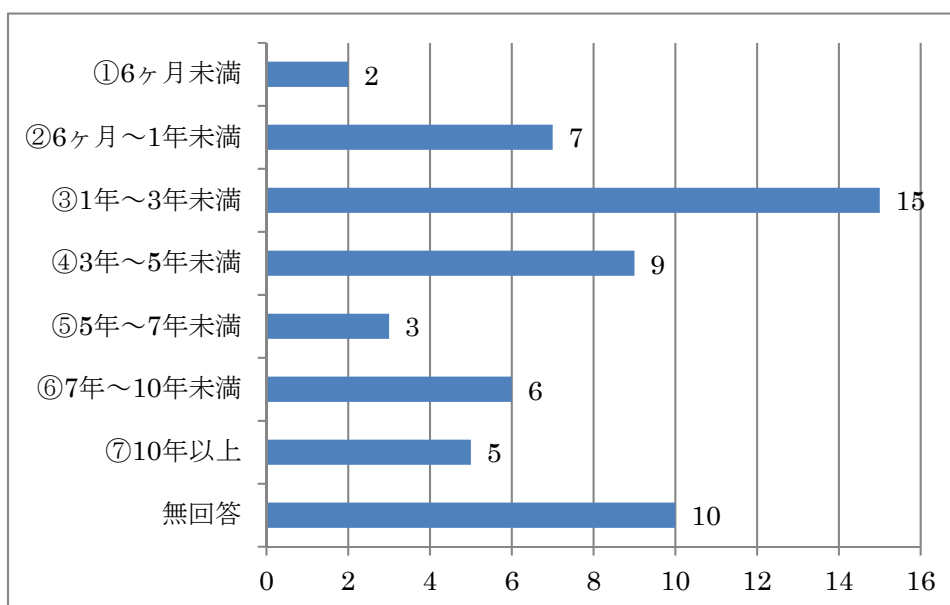
ひきこもりの状態が続いている(いた)期間については、10~20年未満が最も多く、次いで1年~3年未満、7年~10年未満が多くなっています。前回調査では1年未満は全体の24%を占めていましたが、今回調査では1年未満は全体の10%となっています。

Q11 不登校の状態になったのは、お子さんがどの学校に通っていた頃ですか。(〇はひとつだけ)
 (過去に不登校の状態があった場合もお答えください。不登校になったことがなければ、Q13へお進みください。)



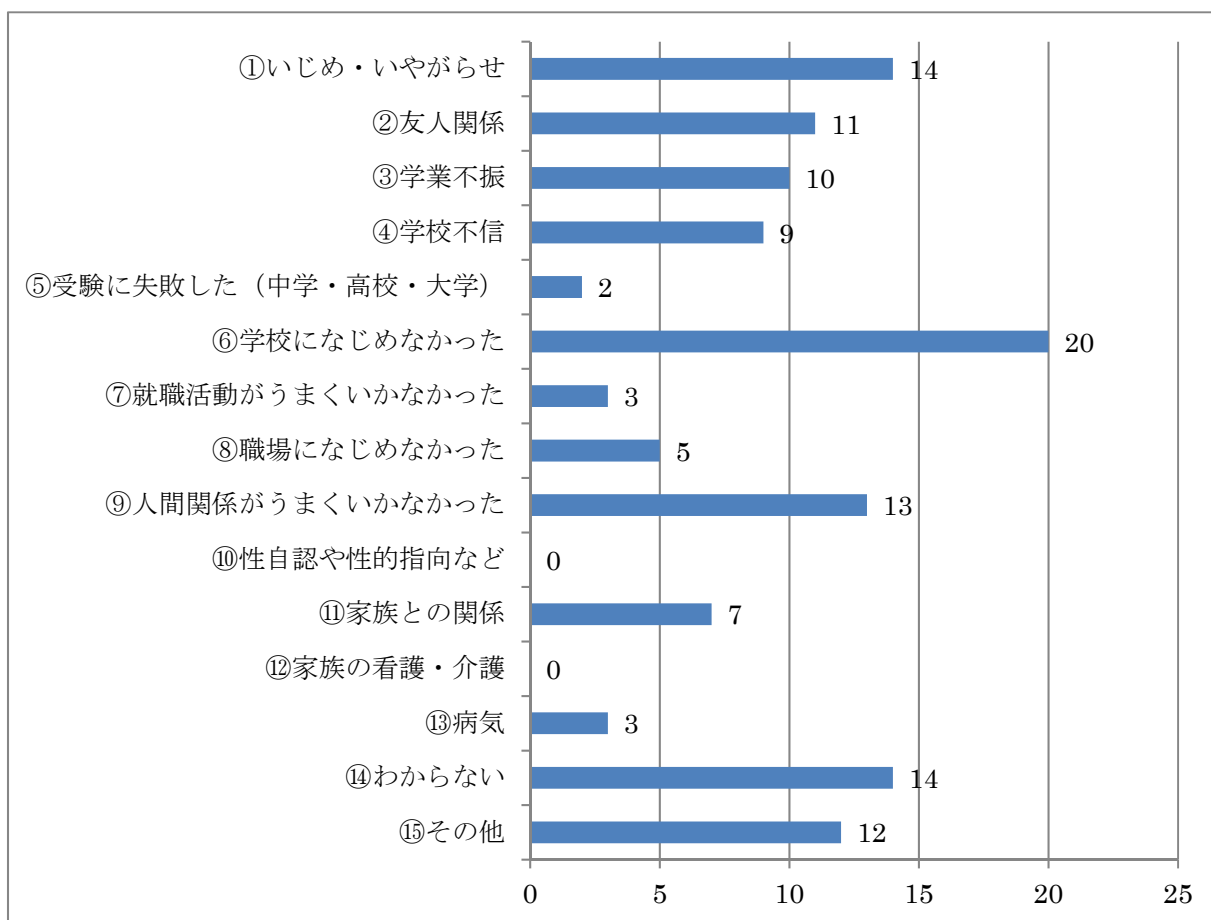
不登校の状態になったのは、中学校の頃が50%と最も多く、次いで小学校が20%、高校等が17%となっています。なお、本項目は今回新たに追加した質問となっています。

Q12 その状態はどれくらい続きましたか。(〇はひとつだけ)



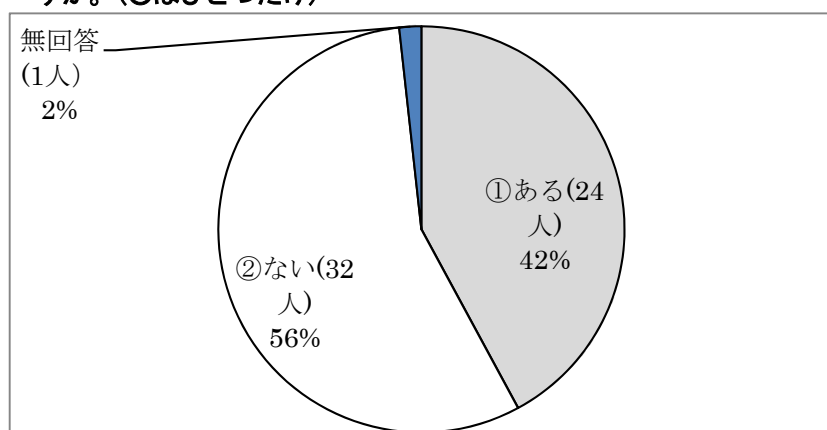
不登校の状態が続いている(いた)期間については、1年～3年未満が最も多く、次いで、3年～5年未満、6ヶ月～1年未満の順に多くなっています。なお、本項目は今回新たに追加した質問となっています。

Q13 ひきこもりや不登校になったきっかけをご記入ください。(〇はいくつでも)



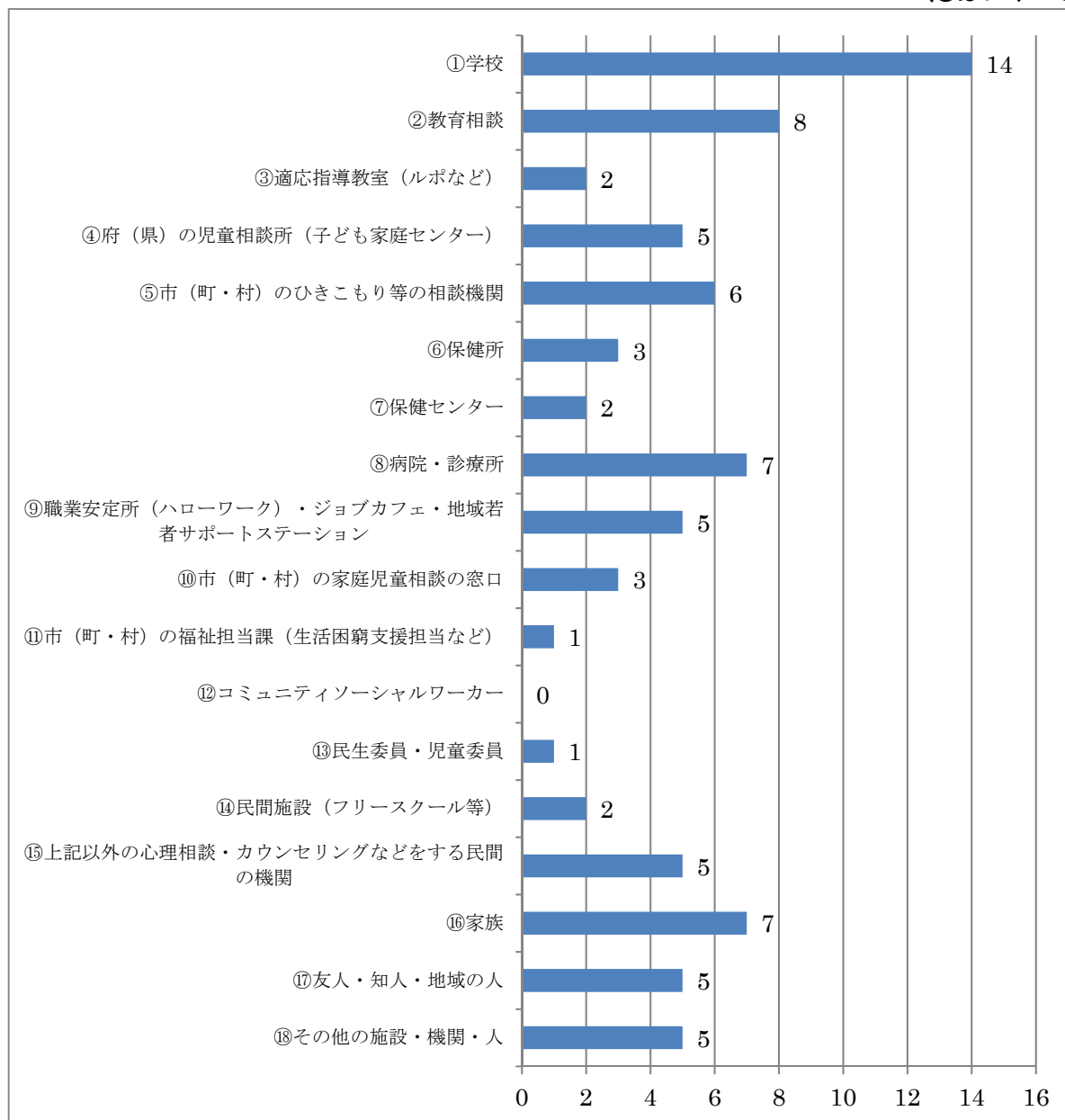
ひきこもりや不登校になったきっかけについては、「学校になじめなかった」が20人で最も多く、次いで、「いじめ・いやがらせ」、「わからない」がそれぞれ14人、「人間関係がうまくいかなかった」が13人となっています。なお、本項目は今回新たに追加した質問となっています。

Q14 ひきこもりや不登校になったことについて、お子さんが関係機関またはどなたかに相談したことはありますか。(〇はひとつだけ)



子ども自身の関係機関等に対する相談の有無については、「ある」が42%、「ない」が56%で、前回調査より、「ある」が6ポイント減少しています。

Q15 どのような相談機関、人に相談しましたか。相談したことのある機関、人に○をつけてください。
(○はいくつでも)

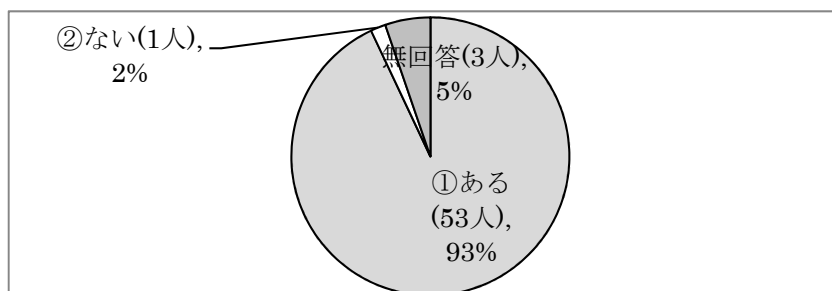


その他の施設・機関・人（具体的に：…）

○親の会、家族会（大阪市） ○NPO、民間の支援団体（京都、兵庫） ○教育委員会

相談したことのある機関や人については、「学校」が14人と最も多く、次いで「教育相談」が8人、「病院・診療所」、「家族」がそれぞれ7人となっています。前回調査では「病院・診療所」、「学校」、「教育相談」の順に多くなっていました。

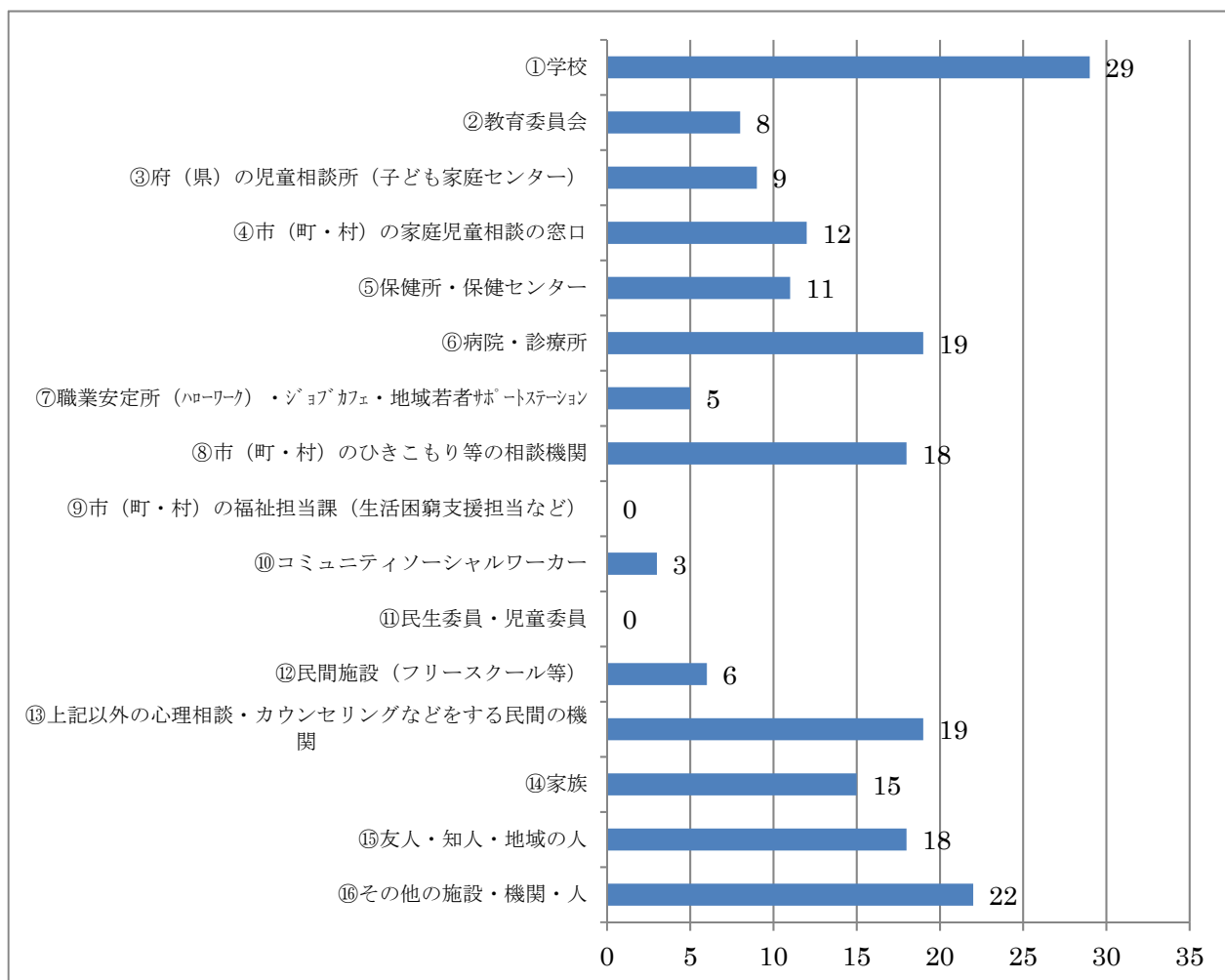
Q16 ひきこもりや不登校になったことについて、ご家族が関係機関またはどなたかに相談したことはありますか。(〇はひとつだけ)



家族の関係機関等に対する相談の有無については、「ある」が93%で、前回調査より、6ポイント増加しています。

Q17 どのような相談機関、人に相談しましたか。相談したことのある機関、人に〇をつけてください。

(〇はいくつでも)



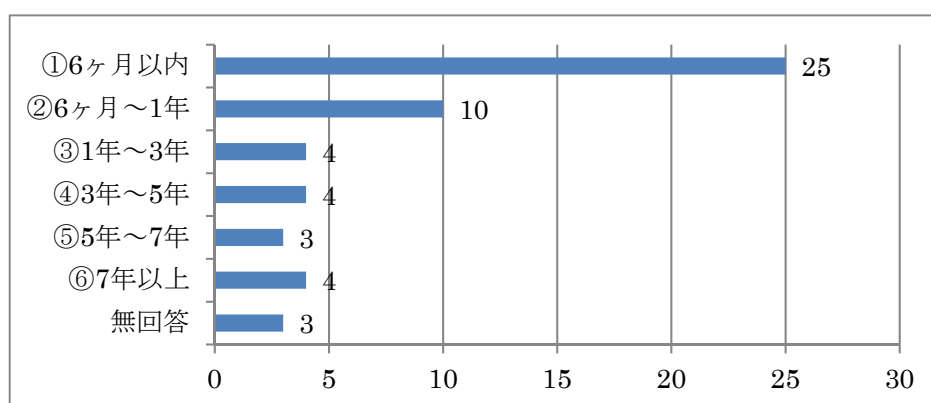
その他の施設・機関・人(具体的に:…)

○親の会、家族会等 ○職場関係 ○NPOの教育相談機関 など

家族が相談した機関等について、学校が29人で最も多く、次いでその他の施設が22人、病院・診療所、上記以外の心理相談・カウンセリングなどをする民間の機関がそれぞれ19人となっています。前回調査では、その他の施設、学校、病院・診療所の順に多くなっていました。

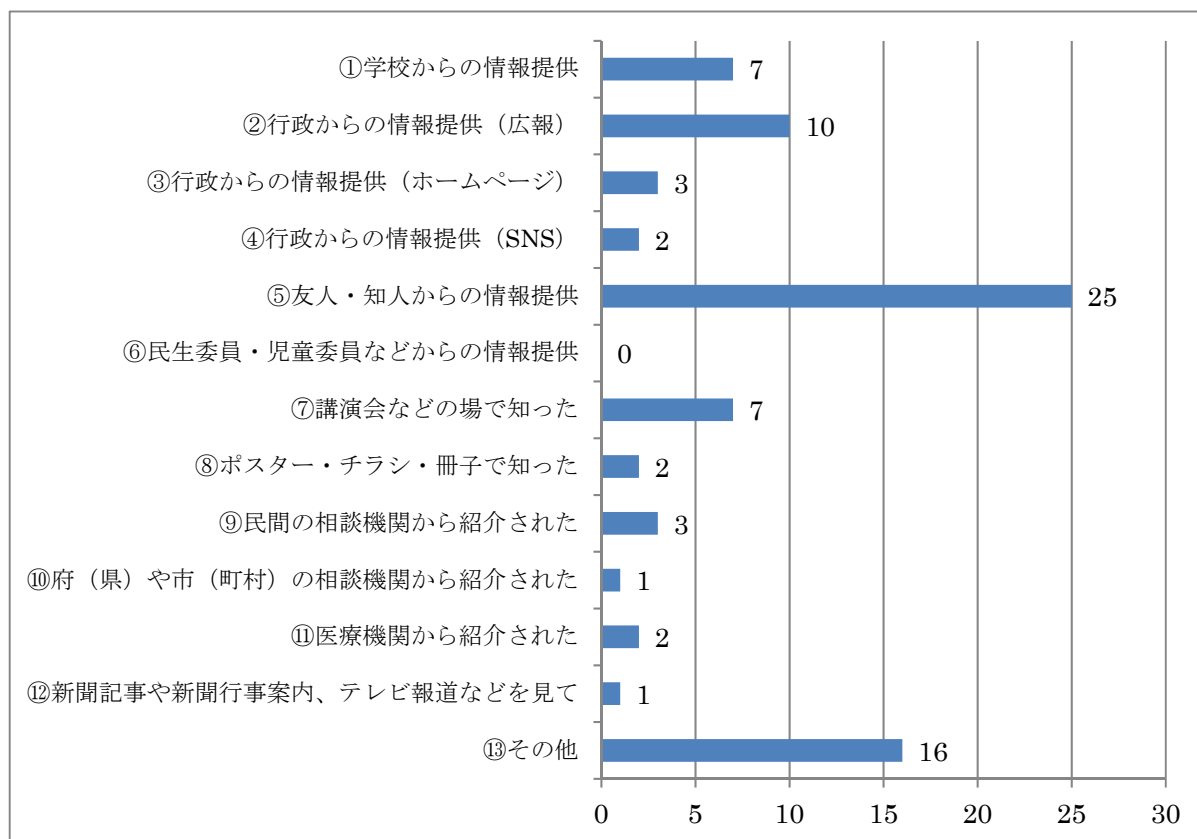
Q18 お子さんがひきこもりや不登校になり、相談機関につながるまでどのくらいの期間がありましたか。

(〇はひとつだけ)



相談につながるまでの期間については、6ヶ月以内が最も多く、次いで、6ヶ月～1年となっており、前回調査とほぼ同様の傾向となっています。

Q19 相談機関につながったきっかけについて教えてください。(〇はいくつでも)



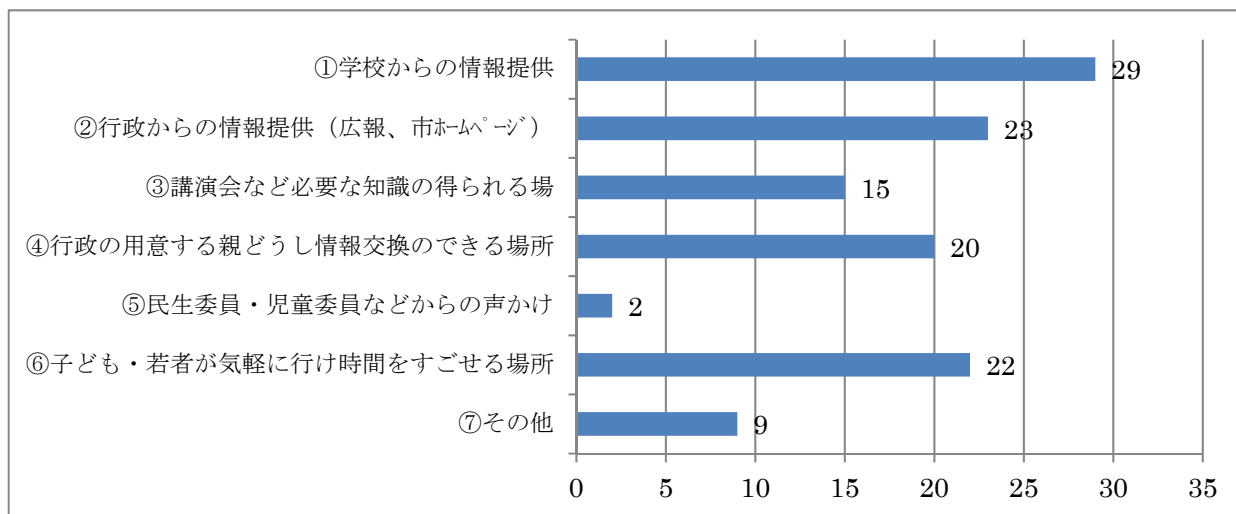
その他 (具体的に:…)

- インターネット
- 親の会・家族会
- 自ら親の会や相談機関を探した
- 以前から知っていた
- スクールカウンセラー など

相談機関につながったきっかけについては、「友人・知人からの情報提供」が最も多く、次いで「その他」、「行政からの情報提供 (広報)」が多くなっています。前回調査では、「友人・知人からの情報提供」、「学校からの情報提供」、「講演会などの場で知った」の順に多くなっていました。

Q20 相談機関につながるまでの期間に、どのような働きかけや施策があったらよかったですか。

(〇はいくつでも)

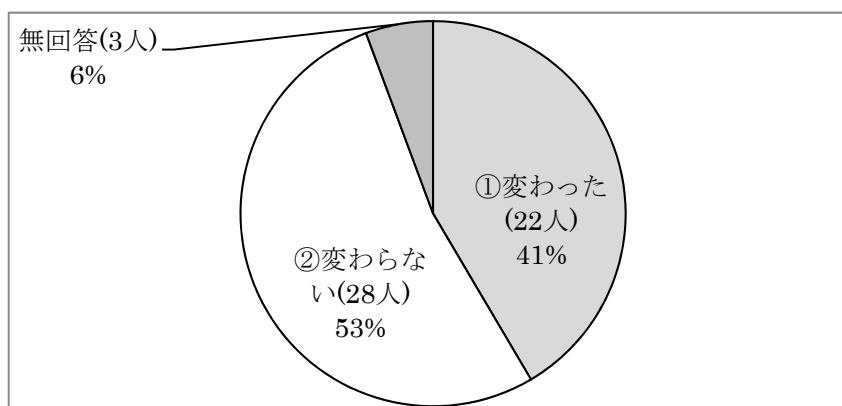


その他 (具体的に:…)

- 家族会の紹介 ○学校で親が通える相談窓口 ○勉強する場や子どもどうしが集える居場所
- 学校からの訪問カウンセラー ○大学生の訪問ボランティア ○専門医と教師や学校との連携
- 学校長の決断 ○中学校卒業前に進路アドバイザーから、可能性を提案してほしかった
- 不登校になってすぐに相談できる場所や人がほしかった。特に小学校低学年の間は学校以外の居場所もなく親の相談先もわからず、孤立感が深まった。

相談につながるまでの間に、どのような働きかけや施策があればよかったかについては、「学校からの情報提供」が最も多く、次いで「行政からの情報提供 (広報、市ホームページ)」、「子ども・若者が気軽に駆けつけられる場所」が多くなっています。この傾向は、前回調査とほぼ同様となっています。

Q21 (家族が) 相談機関につながった結果、お子さんはどう変化しましたか。(〇はひとつだけ)



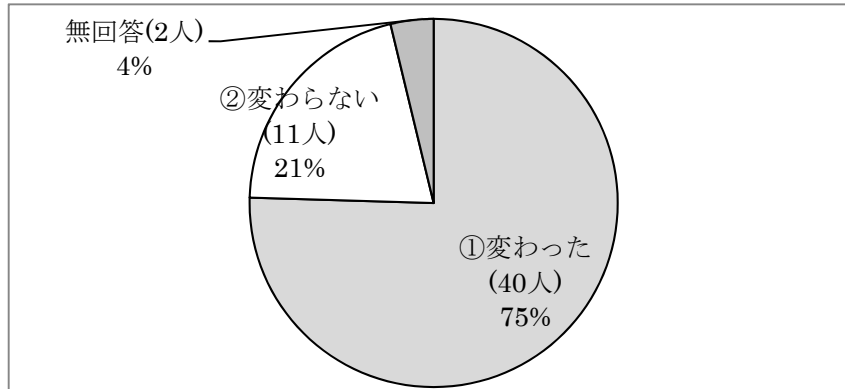
具体的に…

- 親の気持ちが楽になり、子どもと向き合えるようになったことで、子どもが落ち着いてきた。
- 子ども自身が病院へ行きたがり、医師などのサポートがあることで安心した。
- 以前は、親が相談機関に行くことを嫌がっていたが、嫌がらなくなった。
- 外に出かけるようになった。人と関わるようになった。

- 親が安心して子どもに「大丈夫」と言えたことで、親の顔色をみなくなって自分の夢ややりたいことを伝えてくれるようになった。
- 大検を受けた。
- 訪問してくれた先生に心を開き、雑談から少しずつ高卒認定試験、自動車教習所、バイト、予備校、大学受験と動けるようになり、大学を卒業し、就職し、一人暮らしをしている。
- 大学生の訪問により、少しずつ表情が明るくなっていった。
- 自分を受け入れるようになった。困っている事を親や大人に頼ってもよいと思うようになった。
- 家族から大事にされ、家族に守ってもらえる存在だと認識していった。
- 本からの母親ノート法を学び、講演やカウンセリングに行く中で、これなら自分にできると思い続けた。子どもの欲求がエスカレートしていたが、それが収まるという経験をした。
- 友人ができて、サポートセンターにつながり、就職を考えるようになった。
- 気楽に親と話ができるようになり、近所の人とも話ができるようになった。家事の手伝いやスーパーへの買い物にも行くようになった。
- 自分の考えで行動するようになった。
- 転居して静かに過ごせる場所を得たことやスクールカウンセラーとの出会い、フリースクールからの訪問などにより、子どもが落ちつきを取り戻していった。
- 学校で、いじめの事実を認められず、悩んでいたが、相談機関で子どもの思いをしっかりと聞いてもらうことができ、心の回復につながった。
- 同じような境遇の若者や経験者がスタッフなので、支援機関に参加しやすかった
- 学校行事があると体調がすぐれないと聞いたが、2学期から地元へ転校予定で、以前の友達と通えることを心待ちしている。
- 子どもは相談機関につながっていない。
- つながったばかりで、まだ変化がない。
- ほとんど変わらない。
- 親が相談に行くのはかまわないが、自分には行かないと考えている。
- 部屋に鍵をかけたままで家族との接見を拒否している。
- 子どもが支援機関に通っていたが、突然行かなくなった。理由は何も話してくれない。
- 子どもは学ぶ・働くのどちらかを提示されると楽な方を選んでしまう。親以外の関わりが思春期には必要。
- 相談に行ってますが、いまだに就職活動を続けている。もう少し厳しくしてほしい。

家族が相談機関等につながった結果、子どもが変化したかどうかについては、変わったが41%で、変わらないが53%となっています。前回調査では、変わったが50%、変わらないが37%でした。

Q22 相談機関につながった結果、ご家族はどう変化しましたか。(〇はひとつだけ)



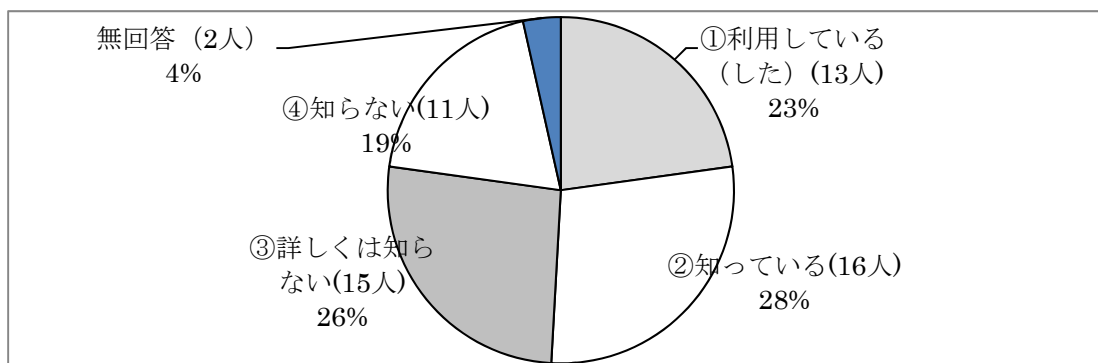
具体的に…

- 人と話したことがプラスに作用し、家に帰ってからの子どもの接し方に余裕を持てる時がある。
- 気持ちが楽になり、長い目で子どもを受け入れることができるようになった。一人で抱えこんでいるという思いから、いくらか解放された。
- 自身自分と向き合うようになり、家族関係を深く考えるようになった。子どもを信じて任せて待つことを学んだ。家族会への参加と並行して、教育相談を受けたのがよかった。
- 落ち着いて子どもを見守れるようになった。
- 夫婦で子育てについて話し合うようになった。
- 先のことが、わからないながらも、道があることがわかった。
- 他の方などの話を聞いたり、相談したりして気持ちが楽になった。
- 安心して家にいられた。
- 時間をかけて、少しずつ変化があった。すぐに結果につながるものではない。
- 子どもの話を聴けるようになった。
- 多くの情報やアドバイスを受け、子どもは理由があつてひきこもっているのに、ひきこもりをやめさせようという考えが間違っていたことに気づいた。
- 学校へ行くよう無理強いすることがなくなった。
- 父親が子どもにきつくあたらなくなった。
- 同じ不登校の兄弟にもよい影響があつた。外部の人が理解し、関わってくれることがありがたかつた。
- 親子の共依存的な問題に気づいていくに従い、お互いを尊重するようになった。家の中での距離が近すぎて、しんどくなるので、子どもは全寮制の高校に進学した。お互いに無関心でなく、過関心でない距離感をとるようになった。
- 中学校は2週間ほどしか通わなかったが、今では家事や買い物もよくしてくれるようになり、資格なども取得して、兄弟や父親とも仲がよい状態となっている。
- 本人は仕事の話になると支援機関へ行かなくなり、先へ進む意思が無いということだと思い、その後の対応に悩んだ。
- 暗いことばかり考えていたが、明るい方向に考えが変わりはじめた。
- 特に、変わらないが、子どものいいところを見つけてほめるようにしている。
- 気持ちは楽になったが、不安な気持ちは変わらない。本人の苦しさを受け止めたいが、なかなか話すことができず、悲しい。

- 「信じて、まかせて、待つ、忍耐、修行、ゆっくり、あきらめない」など教えていただき見守るようになった。
- 不登校になって、あまり日を置かずに相談機関につながることができ、親も子も傷つかずにゆったりと過ごすことができ、立ち直りも覚悟していたより、ずっと順調だった。
- 親どおしのつながりができた。

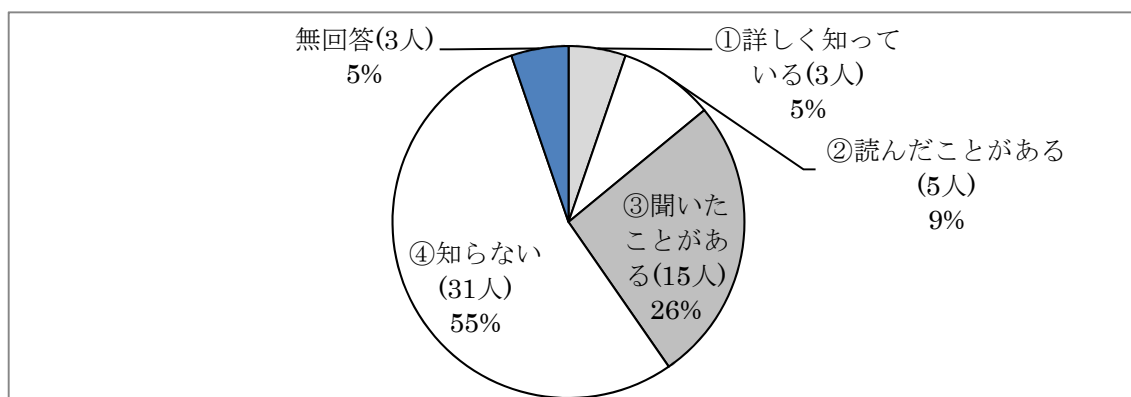
家族が相談機関等につながった結果、家族が変化したかどうかについては、変わったが75%となっており、この傾向は、前回調査とほぼ同様となっています。

Q23 枚方市では、平成 25 年 4 月から「ひきこもり等子ども・若者相談支援センター」を開設し、現在枚方市駅前サンプラザ3号館4階の子どもの育ち見守り室「となとな」内で相談をお受けしています。「ひきこもり等子ども・若者相談支援センター」があることをご存知でしたか。(〇はひとつだけ)



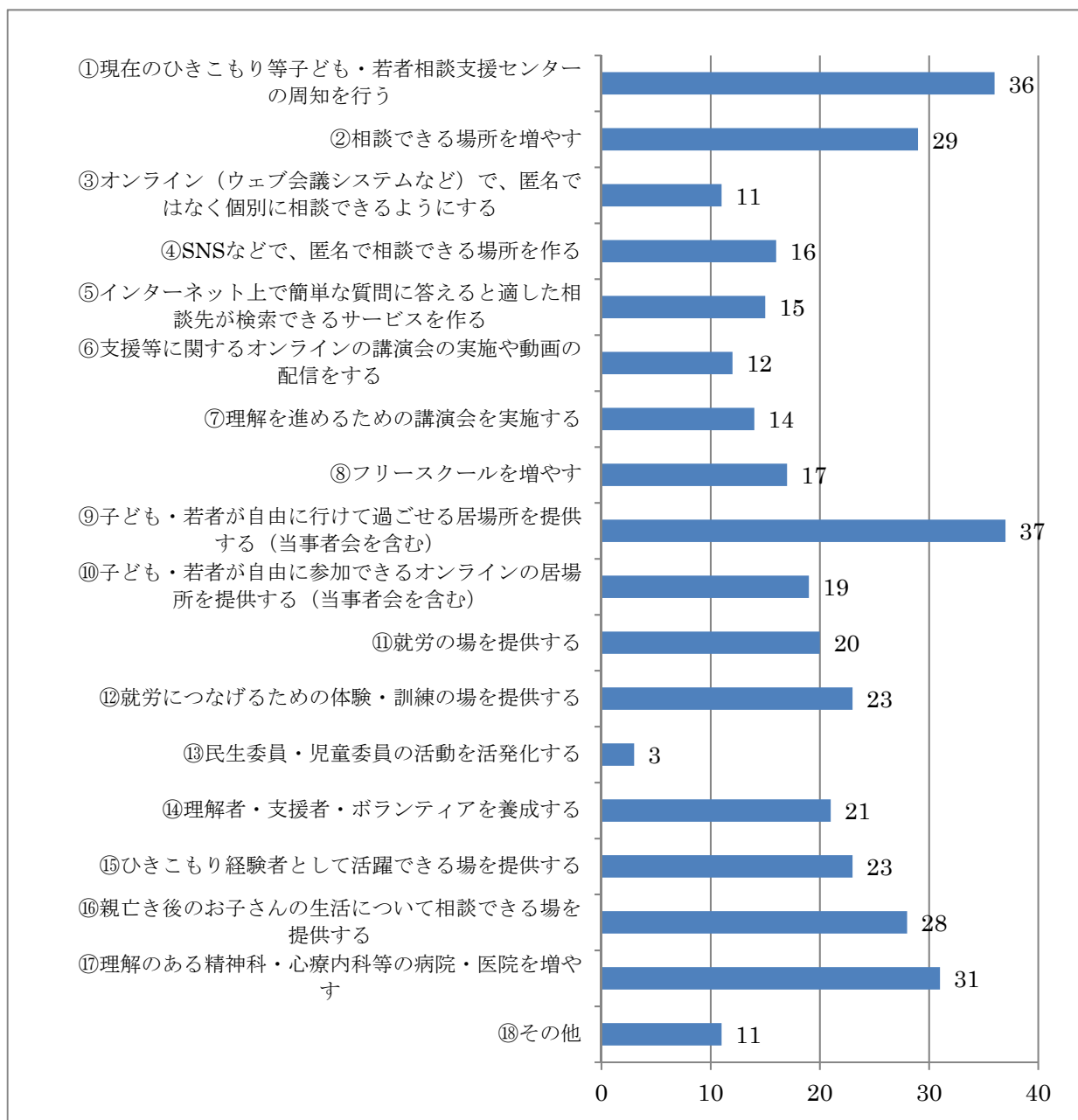
「ひきこもり等子ども・若者相談支援センター」を利用している(した)人は23%で前回調査より11ポイント増加しています。また、「知らない」人は19%で、前回調査より11ポイント減少しています。

Q24 枚方市では、平成 25 年から「枚方市子ども・若者育成計画 ～ひきこもり等の子ども・若者の自立に向けて～」に沿って施策を進めているところです。「枚方市子ども・若者育成計画」があることをご存知でしたか。(〇はひとつだけ)



「枚方市子ども・若者育成計画」について「詳しく知っている」、「読んだことがある」人は、全体の14%で前回調査より1ポイント増加していますが、「知らない」人は全体の55%で、前回調査より13ポイント増加しています。

Q25 枚方市でひきこもり等の支援を今後もおこなう場合、どのような試みが必要と思いますか。市役所でできることだけでなく、民間でできると思われることも含めてお答えください。(〇はいくつでも)



その他(具体的に:…)

○親の会に対する支援

○相談や支援に関する全てのことにお金がかからない(無料)ようにしてほしい。

○電車やバスに乗れないので、定期的に訪問してくれる医療体制があれば助かる。

○子どもは家から動けないので、訪問してくれる支援者やボランティア、専門家の養成を望む。

○学校の対応力 ○職場の紹介 ○民間のカウンセリング費用に対する補助

○サンプラザに相談に行ったが何の力にもなってもらえず、とても残念だった。

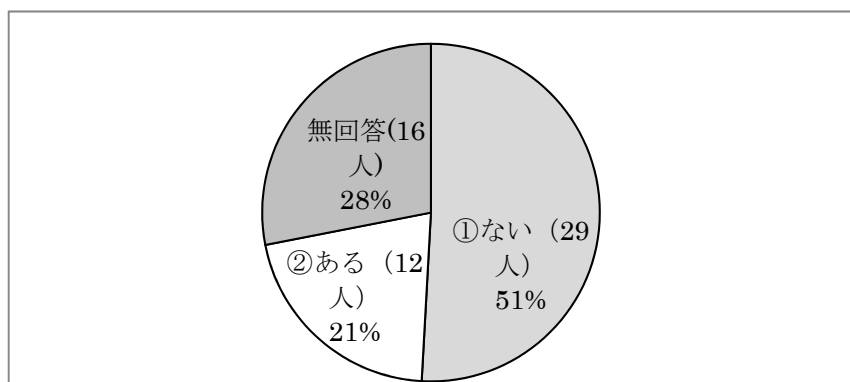
○同じ境遇の若者が気軽に集まり、一人ひとりの個性をのばすことができる方法。

○当事者の親や家族による居場所づくり。 ○枚方市外の人でも利用できるような支援

○中学生以上を対象とするのではなく、小学生も対象とした相談先や施設を増やしてほしい。ルポも小学生が通いやすいように環境を整えたり、プログラムを検討してほしい。

ひきこもり等の支援を今後もおこなう場合にどのような試みが必要かについては、「子ども・若者が自由に行けて過ごせる居場所を提供する（当事者会を含む）」が最も多く、次いで、「現在のひきこもり等子ども・若者相談支援センターの周知を行う」が多くなっています。前回調査では「ひきこもり経験者が活躍できる支援現場」が最も多く、次いで、「理解のある精神科・心療内科等の病院・医院を増やす」が多くなっていました。

Q26 新型コロナウイルス感染症の感染拡大やこれに伴う新しい生活様式の実践など社会環境に変化がありますが、ひきこもり・不登校に関して何らかの影響があったかどうかお答えください。（影響の具体例：ひきこもり等が始まった。ひきこもり等の状況が悪化した。不登校であったがオンライン授業に参加できるようになった。オンラインのイベントなどに参加できるようになった。ひきこもり等の相談がしづらくなった。社会との関わりが少なくなった。など）（〇はひとつだけ）



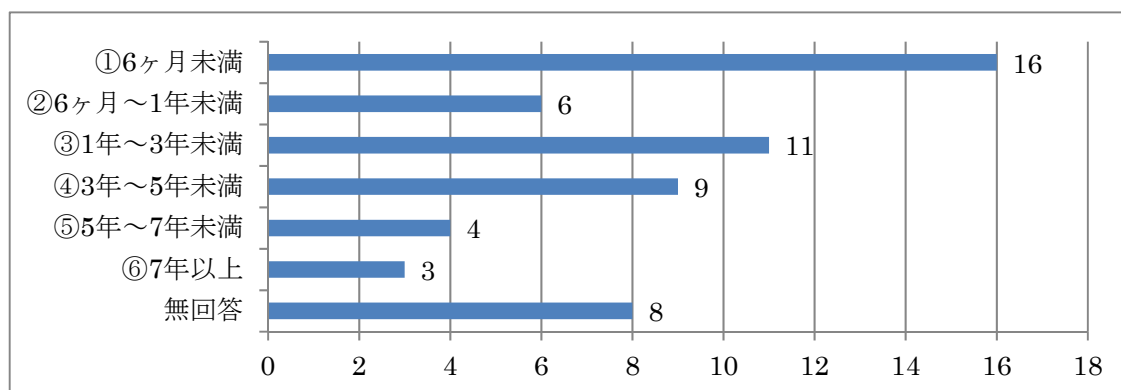
具体的にご記入ください（受けた影響の内容など）

- 外に出づらくなった。家族に感染することを恐れて、社会と関わる場面が少なくなった。
- ほぼ毎日近所に外出しており、あまり普段と変わらない生活をしているが、電車等で遠く出かけるのは警戒している。
- 外に出なくてよい社会の状況であったため、反対に気持ちが安定していた。
- コロナにより、分散登校になった時は少人数と時短だったおかげなのか、登校できた。
- 警戒心が強くなった。ワクチンに対しても副反応に対する不安が強く、1度も受けていない。
- 行ける場所が少なくなり、行動が制限された。
- コロナ前に不登校、引きこもりは解決したのでわからない。
- コロナにより、これまで月1回あったNPOの勉強会等が、数ヶ月～1年間なかったので困った。
- ウイルス、菌は人と共存しないといけないし、マスクやワクチンは本当に必要なものなのか。若者の死因の多くは自殺。根本をかえないとひきこもりは減らない。
- 外出しないので、入浴回数が減った。
- 休校時は学校に行かなくてよいという解放感で元気になった時期もあったが、学校が再開すると元通りになってしまった。長期的にみるとコロナの影響で外出が減るので家にこもることが多くなった。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大やこれに伴う新しい生活様式の実践などにより、ひきこもり・不登校に関して何らかの影響があったかどうかについては、ないが51%、あるが21%となっています。なお、本項目は今回新たに追加した質問となっています。

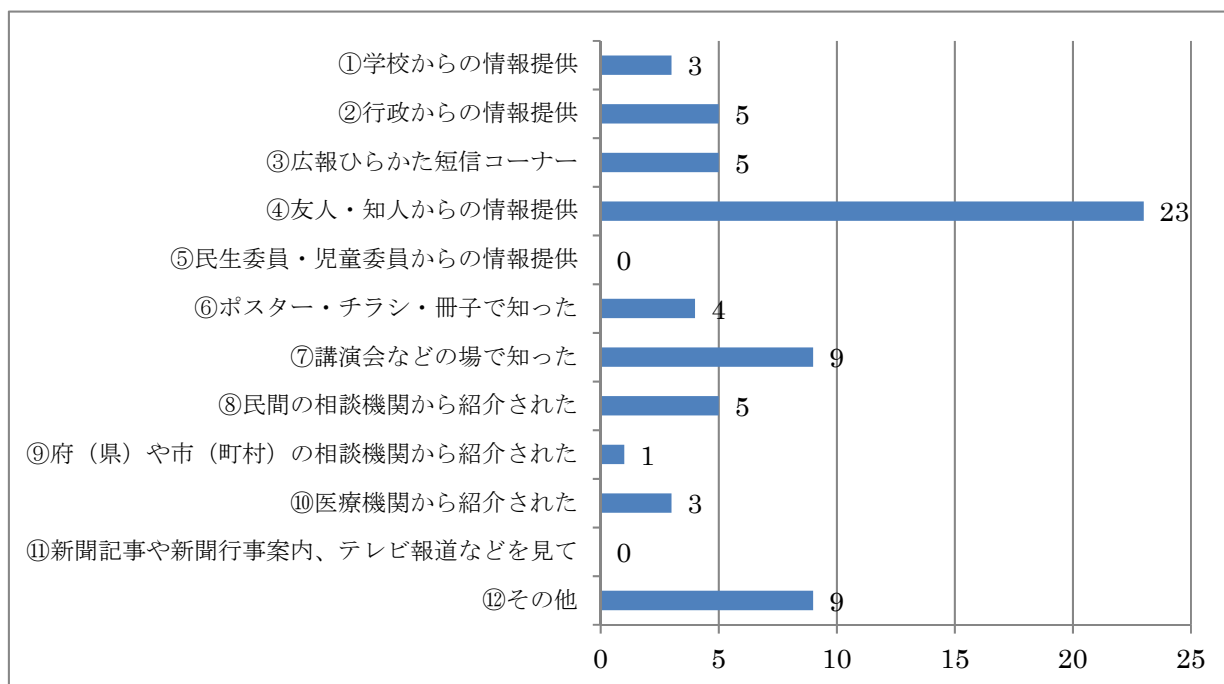
II. 家族会について

Q27 家族会についてお尋ねします。お子さんがひきこもりや不登校になり、家族会につながるまでのどのくらいの期間がありましたか。(〇はひとつだけ)



家族会につながるまでの期間については、6ヶ月未満が最も多く、次いで、1年～3年未満が多くなっています。前回調査では3年以上は全体の7%でしたが、今回調査では3年以上は全体の28%を占めています。

Q28 家族会につながったきっかけについてお教えてください。(〇はいくつでも)

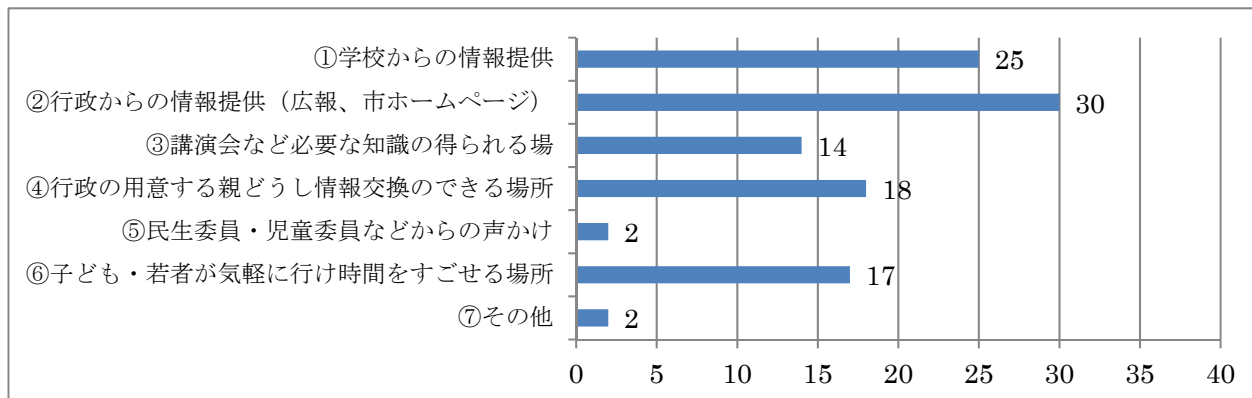


その他(具体的に:…)

- インターネット
 退職教員の相談機関
 身内からの情報提供
 教職員組合の先生
 自分で市役所の担当者に尋ねた

家族会につながったきっかけについては、「友人・知人からの情報提供」が最も多く、次いで、「講演会などの場で知った」、「その他」が多くなっています。前回調査では、「友人・知人からの情報提供」、「学校からの情報提供」、「ポスター・チラシ・冊子で知った」の順に多くなっていました。

Q29 家族会につながるまでの期間にどのような働きかけや施策があったらよかったですか。(〇はいくつでも)

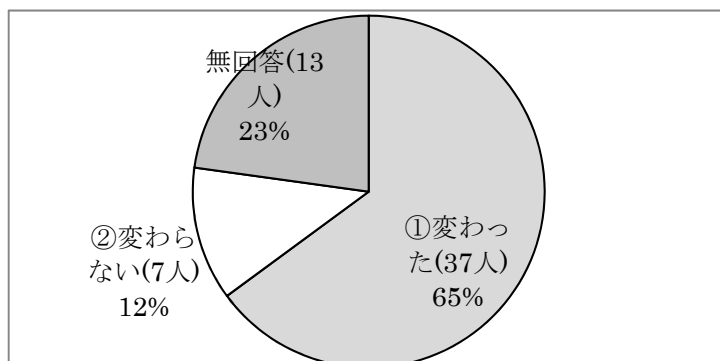


その他 (具体的に:…)

○学校からの親の会の紹介

家族会につながるまでの期間にどのような働きかけや施策があったらよかったですかについては、「行政からの情報提供 (広報、市ホームページ)」が最も多く、次いで、「学校からの情報提供」が多くなっています。前回調査で最も多かったのは「学校からの情報提供」でした。

Q30 家族会につながった結果、ご家族はどう変化しましたか。(〇はひとつだけ)



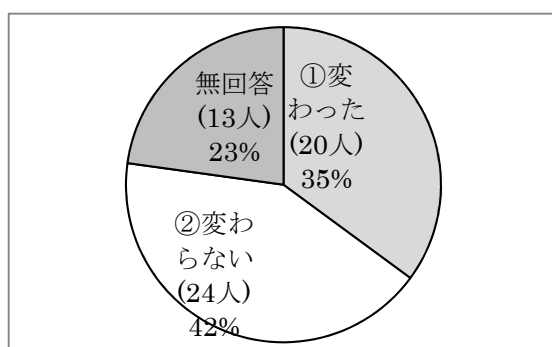
具体的に…

- 家族会に参加することで、本人との関わり方が多面的になるのは望むところだが、それ以上に父母の関係性が変わることの方が望まれる。父母が同じ立ち位置に立つことが子どものこれからのためには必要。
- 安心して話せる仲間が見つかった。
- 親どうしの共感が得られ、自分だけではないと感じて安心した。孤立感がなくなり、心が楽になった。
- 気持ちが楽になり、長い目で子どもを受け入れることができるようになった。一人で抱え込んでいるという思いから、いくらか解放された。
- 同じなやみの親との交流ができてホッとした。
- いろいろな人の話や対応などを聞くことで、接し方に少し余裕が出たように思う。
- 夫が留守がちな家庭で何事にも私中心に決めることが多く、夫も問題から逃げているようなところがあったが、子どものことを夫婦で話合うようになり、夫婦仲もよくなった。同居の義母のやさしさに助けられたところも大きい。家族会でたっぷり悩みを話せ、人の体験を聞いて気づくことが多かった。価値観、人生観が変わった。
- 子どもに対する考え方、接し方が変わった。

- 子どものひきこもりを認める。生きたいように生きられるよう、安心してひきこまれる場や時を提供し、子どもが動き出す時を待つ。
- 本人が一番つらいという事を認識した。
- 安心して子どもに「大丈夫」と言えるようになり、登校を強制しなくなった。
- 不登校やひきこもりの勉強会が役にたった。親の安定が大切。
- わがママをさしているという言葉に傷ついていたが、家族会の人たちは、そんなことを言わずに共感して聞いてくれた。それだけでもホッとした。
- 子どもへの対応の仕方を長い間勉強させていただき、今まで知らずにいたことを教わった。間違った対応をたくさんして来たので反省することも多い。今まで多くの講演会に参加させていただいたり、支援施設の見学も行かせていただいた。私の考え方も変わり子どもに対する考え方も変わった。現在は新たな家族会に参加している。
- まわりに子どものことや悩みを話せるようになり、近所の人にも「見かけたら声かけたってー」などと協力を求めることができるようになった。ひきこもっている人の多さに気がつき、本人を変えるのではなく、社会の対策を変えたいと思った。
- 家族会に参加したことがあります、みんなの前で話すのが苦手な疲れで、それ以来行ってない。
- 家庭が明るくなった。
- 病院の相談窓口につながった。
- 相談できる場所があることを知っても、忙しくて何もできずに、時間だけが過ぎて行く。結局は後回しになってしまう。

家族会につながった結果、家族が変化したかどうかについては、変わったが 65%、変わらないが 12%と なっています。前回調査では、変わったが 88%、変わらないが 5%でした。

Q31 家族会につながった結果、お子さんはどう変化しましたか。(〇はひとつだけ)



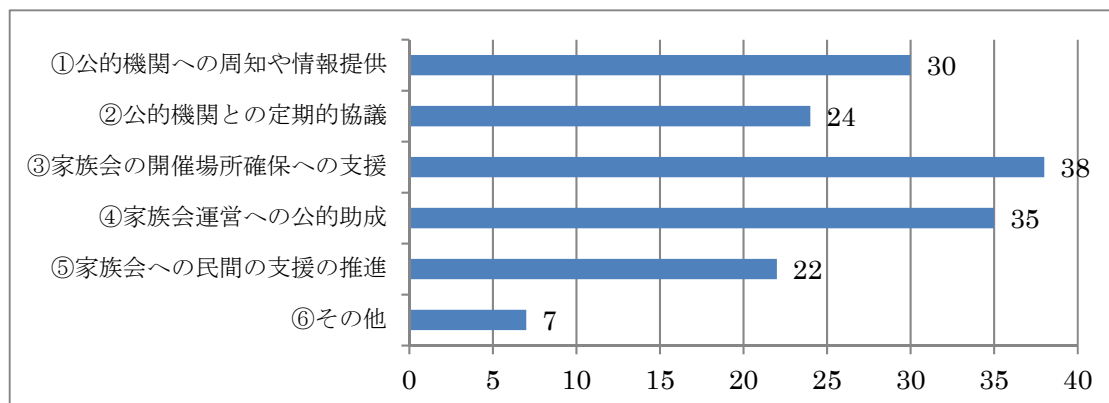
具体的に…

- 急には変わらないし、変わらないと思う。そもそも、変わる必要はないのではないかと。本人はそのままでもいいはず。変わらなければいけないのは家族の方だと今までの長い経験から思う。
- 親が家族会につながったからといって、子どもにすぐ変化は出ない。ただ、親の気持ちが少しでも楽になることは子どもにとって良い影響があるのではないかとと思う。
- 私の接し方が本人の話をよく聞けるようになり、少しずつだがあたたかな関係を築くことができるようになった。

- 本人は知りません。
- 具体的な変化はわからない
- 親が自分に対して理解してくれているように思うようになっている。私を生んでくれてありがとうの手紙をくれた。
- 親がいろんな人とつながりを持ったり、いきいき活動することで子どもも自分のやりたいことをどんどんやり始め、活力を取り戻した。
- 穏やかになった。
- 同じような年代の不登校の子どもたちと交流、活動することによって「自分だけではないんだ」と気持ちが開放された。
- 親の考え方を変えたことで子どもにも変化があった。
- 親が落ち着いたら子どもの行動が理解できたのか一つ一つ変化が見えてきた。いろんな場面でその子なりの理由があるという事がわかって理解できるようになってきた。
- 親が安心したので、子どもが自分のことをいろいろ話した。
- 親が安定したことで、子どもも落ちついた。
- 少し変わった。子どもへの対応を相談して、親が少し明るくなれ、子どもに少しゆとりを持って接する日もでき、子どもも少し私に当たるのがマシな日もあるようになった。
- 他人と話せる場が少し増えて、悪い人ばかりでないと思えるようになってきた気がする。
- あまり変わらないが、親の気持ちが出せる場があってよかった。
- 子どもと普通に会話ができるようになりたいと願っていたが、今は普通の会話ができるようになりうれしく思っている。表情も明るくなり、よく話しかけてくれることがある。
- 本人は家族会に参加をしようとせず、外部の方と気軽に話しができないのが困る。
- 話はできていないが、家族の役に立つことをしてくれている。
- 親が安心することで子どもへの信頼も芽生え、子どもも明るくなった。
- 親が精神的にゆとりをもつことができ、子どもに寄り添うようになれ、子どもも落ちついてきた。
- 笑顔が増え、家族との会話も増えた。
- 心を許せる場所ができて、外出できるようになった。
- 外で働きたい気持ちはあるようだが、どうしたらいいかわからない様子。不登校の時より外に出ることが増えた。

家族会につながった結果、当事者が変化したかどうかについては、変わったが 35%、変わらないが 42% となっています。前回調査では、変わったが 57%、変わらないが 30%でした。

Q32 ひきこもりやニート等は潜在化しており、当事者や家族の方の相談などの必要な支援につなげるうえで、家族会の果たす役割は大きいと考えています。家族会の周知や継続的な運営、また新たな家族会が増えていくために、どのようなことが必要だと思いますか。(〇はいくつでも)



その他 (具体的に)

- 家族には父母だけではなく、兄弟姉妹もいて、当然親と違う思いがあるはず。兄弟姉妹の話せる場の認知度が低すぎると思う。
- 枚方市は長年の取り組みが豊かだと思う。まだまだ家族会が十分知られていないような市もあるような気がします。
- 私的なフリースクールが多いので、公的なフリースクールや40歳以上の子どもの居場所が必要。
- 必要だと思う人に手を差し伸べる。必要だと思っていない人はそれでいい。社会現象であることを認識して思春期の若者のサポートを、真剣に市町村が義務教育を名ばかりにせず、次の進路につなげる取り組みをしてほしい。
- 8050問題といわれ経済的にも親の負担は大変。少しでも年金の形で補助するような、法律化を進めてほしい。
- 「ひきこもり」という表現に抵抗がある。ネーミングを変えられるといいなあとと思う。

家族会の周知や継続的な運営、また新たな家族会が増えていくために、どのようなことが必要かについては、家族会の開催場所確保への支援が67%と最も多く、家族会運営への公的助成が61%となっています。前回調査で最も多かったのは家族会運営への公的助成で70%でした。

Q33 最後の質問です。現在、子ども(当事者)やご家族が感じておられる心配なこと、あるいは変化のきっかけとなる(なった)こと、I、IIの設問では伝え切れなかったことなど、ご自由にご記入ください。

○長年、親が引き出させてやれなかった持っている力をゆっくり出せる状況の中、経験したことを自分の言葉で話せる場数を重ね、自分もしんどいながら、縁があって支援する立場に日々正面から向き合っている。私たち親も家族会の世話人として、社会との関わりを求める手がかりを一緒に探している。よく言われる「何がきっかけで？」という言葉は100人いれば100通り、それ以上だが、片親が亡くなくても変わらない。何を考えているかわからないと言われる本人が、自分のことは1番よく深く考えていると信じること、親子としての社会人としての信頼関係を築いていくこと、社会との関わりの前に一番基本の家族としての核を揺らぎのないものにすることが大切かと思う。それと迷った時に受けてくれる支援員、相談員の育成に力が注がれてもいいのではないかな。経験した者が支援員とし

て動き出すのと、経験のない者が熱い想いをもっていたとしても違いはある。経験者が支援者として動ける場が増えることを願う。

○不登校やひきこもりは個人や家庭だけの責任ではなく、社会全体の責任。管理と競争による、学校や企業のひずみが子どもにしわ寄せがきて、追い詰めている。官民一体になった支援を強く望む。

○不登校やひきこもりは、100人いれば100通りのケースになり、1つとして同じものは無いと感じている。子どもたちは本当は学校に行きたい、行きたいけど行けない自分を情けないと追い詰めて苦しんでいると思う。根本の解決は学校を少人数学級にして、教員の数を増やし、余裕をもって、先生が子どもたちとふれ合える時間ができるようにすることだと思う。

ただ、目の前の子どもが苦しんでいるのに、それを追い詰めてしまう親にならないよう、相談機関や親の会は大切だと思う。親もまたいろんなものに追いつめられて生活している。対処療法的な相談等ではなく、親もありのままの自分を受け止めてくれる場が必要だと思う。自分を受け入れてもらえて初めて子も受け入れられるようになった。かかる時間は各家庭で違うと思うが、子ども・若者が自ら立ち上がる力をつけるまで、ゆっくりと見守ることが大切。その支援としての行政の力は心強いもの。これからも、子ども・若者たちのためになる施策づくりをお願いしたい。

○年を重ねるにつれて、子ども自身の体調の心配が大きい。親自身も体力的、経済的に弱っていく中、「子どもと過ごす。一日一日を大切に送る」ということに変わりはないのだが、子どもに任せることに少しずつ自信がなくなっている。

○親として勉強不足、行動不足は痛切に感じている。さまざまな情報が簡単に手に入る今、本人はこもっている間、いろいろと検索していると思うが、コミュニケーションがとれていないので、わからない。心療内科等オンラインで簡単に相談できる場所がもっとあればと思う。

○子どもが中3の2学期から不登校になり、長い年月が流れ、不登校からひきこもり、二度の入院等を経て、あっという間の20年だった。退職して少しずつだが、話を聞きながら生活してきた。子どもは家の手伝いをよくするようになった。最近は夕食作りを一緒によくしている。自分の趣味の買い物、外出をし、人とのつながりは大きく広がってはいないが、マンションの近所の人とはエレベーターで軽くあいさつなどはかわす。マンションの消防点検で業者が来るのを「一人でやるから・・・」と担当してくれたりするが、買い物ができないなど、困りごとたくさんある。うまくいかないこともあるが、少しずつ他の人との交流が広がっていくことを願いながら接していきたい。

○子どもが自分の不登校、ひきこもりから現在に至るまでをどう整理し、どう折り合いをつけて生きてきたのか、親としては気になるが、あらためて尋ねたことがないのでわからない。結婚はしたものの、子どもを作ろうとしないのも、自分の経験が影響しているのだろうかと思ひ深読みして切なくなる。

○中学2年生の3学期から18才になるまでひきこもりの状態だった。子どもにとって、自分をとり戻す時間が必要だったと思っている。18才から3年間高校に通い、今は大学4年生で就職活動を行う程になった。友だちや家族などと普通に話しをできているが、就職後、つまりいてニートになったりひきこもってしまうかもしれないという不安もある。

社会問題になっている8050問題だが、今の社会は自己責任や負け組、勝ち組が顕著にあらわれていると思う。もっと社会全体が寛容な社会になることが必要だと思う。家族や当事者の助けになるようにいろいろな取り組みをしてほしいと思う。

○中学3年の受験時にシャッターを降ろすかのように部屋から出なくなってしまった。小学校時代に通っていたとなとの先生に相談ができたことや担任の先生のご理解もあって、当初は不安だったが、先生方に

相談できたことが、子どもに対して安心できるような対応につながったように思え、とてもありがたかった。受験日前日に受験してくれると一旦扉を開いてくれ、本当に嬉しかった。

卒業式まで時々欠席はあったが、なんとか登校できた。しかし、その後、進学した高校で、すぐに心を閉ざしてしまい、クラスに入ることができずの状態になった。15才を境に扱いが大人となり、厳しい対応を感じ、苦しかった。ただ、となとなの先生に相談できたのはよかったし、民間の病院やカウンセリングにも相談したり、家族会にも参加し、四苦八苦しなげらなるとか日々を過ごし、転学後、ゆっくりと自分のペースで行くことができた。関わってくださった方々に感謝の気持ちでいっぱい。

- 昼夜逆転が多く、よく夜間に問題を起こすことが多いので、24時間気軽に無料で相談できるところがほしい。小学生の不登校が増えているので、小さい子どもと一緒に相談ができるところがほしい。発達障がいや精神不安定など気軽に医療相談や支援が受けられるところがほしい。
- 小学校4年生から不登校になり、担任の先生から6年間はおかかりますよ！と言われ、とってもショックだった。それから、手を何回も洗ったりと神経質になり、暴力を振うようになり、いろいろな場所に相談に行った。学校から紹介されたボランティアのお兄さんや家庭教師に来てもらい、パソコンや運動などもできるようになって、少しは自信がもてたようだった。ボランティアのお兄さんのサークルで友だちができて、色々なところに行けるようになった。現在、東京でひとり暮らしをしている。大学の友達の仕事を手伝いしている。大変みたいだが、自分の決めた好きな仕事なので応援している。
- 枚方にフリースクールなど学校以外の選択肢を増やしてほしい。また、フリースクールなどに通う際の助成金を出してほしい。不登校になるとお金がかかる。うちのように、フリースクールに行かせたくても経済的な理由であきらめる家庭もあると思う。学校が合わないだけでこんな大変な状況になってしまうので、なんとかフリースクールに行かせるために助成金をお願いしたい。
- 私は常勤で仕事をしていたため、市の相談窓口に行くことが難しく、主人が相談に行っていたが、私は仕事を休めず行くことができなかった。土・日・祝の市の窓口の開設を切に願う。同じ想いの人がいるのでは？
- 8050問題がテレビなどで取りあげられ、我が家もそのようになるかもという不安と、これではいけない・何とかしなければというあせりが交じりあっている。今は不安の方が大きい。
- 本人はコミュニケーションが苦手で、社会生活に支障をきたしている。相談に行った時、コミュニケーションが難しいと相談に結びつかないと断られたことがある。就労支援では2回目からは自分で電話予約をするのだが、それができずにそのままとなった。コミュニケーションが難しい場合は相談につながらず、親が亡くなった場合、話しづらい子どもがどのようにして生きていくのか不安に思う。今後、仕事ができたとしても、職場での虐待というニュースもよく聞くので心配。
- 親の死後の経済面が心配。
- 以前は、1人で悩むことが多かったが、今は会社で嫌なことがあっても、家でその感情をぶちまけたり、友人に話を聞いてもらって解消したりしている。年齢的なものもあると思うが、やはり周りの人に支えられて成長したのだと思う。家族会でいろいろな人との交流は子どもにとっても親にとっても本当に大事でありがたい。
- 現在、子どもは専門学校に通っている。中3の時に不登校になり、親としてどうしてやればいいか毎日不安な日々を過ごしていた。受験生ということもあり、学校の先生とも相談していたが、結局卒業証書ももらいにくだけになってしまった。高校は2年生、3年生と何度か不登校が続いたが、高校でも担任の先生がいつも気にかけて下さり、親とも連絡をとりあって、前向きな気持ちで支えて下さった。今は、好き

なこと、やりたいことにつなげられる専門学校で自分の性格と格闘しながらも前向きに楽しく通っている。親としては不安はあるが、見守りながら応援していきたい。家族会には1度だけ参加した。親として、心が落ちつき、いろいろな人が声をかけてくれて、救われた思いをした。今でも会報を送っていただき、情報を共有させていただいている。

○親が行けるところがあつてよかった。友人に話しても登校拒否をしてないとなかなかわかってもらえない。

○現在、子どもはアルバイトをしながら1人で生活している。経済的には自立できていないが、精神的には自立できていると思う。経済的に親亡き後が心配。何度かうつ状態をくり返しながらの生活だが、本人は社会資源に頼りたくないと思っている。行政側からいろいろ安心できる情報提供がたくさんあればと思っている。あと、頑張っている親の会（家族会）にも支援があれば良いと思う。

○現在は支援を受けて独り暮らしに挑戦している。ありがたいと思っている。もし、不登校の最初の1~2週間に学校の先生（当時、新卒の先生）がきちんと本人と話し合ってくれていたらと思ひ出し、悲しくなることがある。

○他市に転居し、いじめが原因で中2で不登校。教育委員会や担任に相談したが、家庭や本人のせいとされ、解決しなかった。成績は良かったが、普通校に進学できず、いじめで精神的に病気になり、現在も通院している。本人は勉強が好きで大検を取得し、卒業したが、親も子もつらい日々が今でも続いている。いじめた子は忘れてしまっているが、いじめを受けた方はいつまでも深い傷をおっている。枚方に不登校の会があり、そこで親同士が話し合えたのが唯一の救いであった。子どもが自殺せずに生きてくれているのはありがたい。思いやりのある優しい子だけに、こんなつらい人生を歩ませた人たちが憎い。今もいじめに苦しむ人は多数いる。行政も頑張っていじめの根絶をお願いしたい。一人でも救える社会、思いやりのある社会、一人ひとりが自分らしく生きて行ける社会を実現してほしい。

○家族だけでは解決しないし、年数がかかる。親も子ども孤独にならないような支援を望む。私はあちこち相談所を渡り歩き、講演会も行ったが、子どもは毎日孤独で、ゲーム漬け、昼夜逆転で病気にならないか本当に心配だった。通っていた私立高校は不登校になっても何もしてくれず冷たかったのが悔しかった。公立、私立ともに、教師の不登校生への対応を身に付けてほしいし、各学校に専門家を設置してほしい。

○子どもが1人になっても、安心して生きていける世の中、制度がなければ、親は心配で死ねない。

○家族会は、安心できる場として、長く変わらず身近にありました。つながったおかげで、視野が広くなり、自分が支援する立場の仕事につながったと思う。そんな時もあるよ、そんな生き方もあるよと肯定してくれる人が、社会が身近にあれば、子どもたちは苦しむことなく、自分らしく生きてゆけるのではないかと思う。コロナのおかげで多様性、新しい考え方が生まれた。マイナスだけでなく、プラスの部分もあったと思う。ひきこもりや不登校に対する考え方も、大きく変化するとよいと思う。子どもが2人不登校だったが、15年経ってやっと自分らしく生きようと少しずつ社会参加している。参加しやすい場がたくさんできること、そんな場を作る人になれることを応援したいと思う。

○IT化が進むにつれて、子どもたちのコミュニケーション力が低下していると感じていたが、ITを使ってゲームの場で遊んでいるのもコミュニティと思えるようになった。子どもの居場所探しは本当に困難で、大義名分の場でなければ子どもは行きたがらないので困った。現在の学校は規格・評価の厳しさでできている。学校の教師の質も下がっているし、多量な仕事量で「職員室内で孤立しがち」だと思う。教育委員会も非正規社員の方が多く、教育現場の大人力が高くない。やはり強いリーダー力のある校長でなければ職員室→教師→生徒という弱者に全てがいくなと思う。私は自立支援に関する脳科学的な講演がヒントになった。医療と学校・ボランティアがもっと結びついてほしい。

- 人と人との関わりが大切なのに、マスクやソーシャルディスタンスなどと言ってる限り、大人も子どももしんどくなる人が多くなるだけだと思う。しっかり調べて、市役所の中で声をあげる人が出てくることを望む。
- 私は本に記載のあった「母親ノート法のすすめ」の方法が一番合っており、今でも続けている。普通に学校に行ける子や働いている人がどれだけうらやましかったか。でもこの方法を知り、私自身もいろいろ勉強できた。このアンケートにも書けることを感謝している。不登校など1人もないように願っている。
- 子どもの本音を聞くことは難しい。今までも何度か聞いたことはあるが、何も答えてくれない。本人が就労できないので、将来の経済的な面は心配だが、何とか生き抜いて欲しいと思うので、そのために必要な情報を具体的に子どもに伝えていけたらいいなと思っている。
- 親、先生以外の行政職員から進路、就職時に的確なアドバイスがほしい。進路進学に失敗しても、仕事の方向を決めるサポートがほしい。その結果、社会のテンポと逆行しても、その若者のタイミングが合えば、旅立つような、気長なサポートが一番ほしい。途切れがちな学校教育の場を一貫してつなげるプロのサポーターを求める。
- 子どもは市の広報を見て、自分から「サポートセンターに行く」と言った。親が何かを勧めても「イヤ」と言っていたのに、この言葉を聞いた時はうれしかった。サポートセンターに行き、明るくなり、友人もでき、就職することができて安心していたが、就職して3年を過ぎた頃、「仕事をやめたい」と言ったが、話し合い、辞めずに仕事に就いている。口数が少ないので、何を思っているかわからないが、「自分のしたい仕事が見つかり、次の仕事を決めてたらやめては」と言っている。親亡き後、自立できる人生が送れるよう願っている。
- 話し合うことのみでは進歩がないので、ひきこもり状態の当事者が一堂に集まって内職的な仕事をして厚生年金が適用されるような作業所ができればと思う。1番心配なことは老後の保障がないこと。子どもは積極的に面接等に出かけているが、8年間合格せずでも頑張っている。こんなに熱意があるので夢を壊さないでほしい。
- 母親の私は相談に出かけたり学ぼうとしますが、父親は本人をしっかりとつける等の行動に出てしまいがちで外に出て学ぼうとはせず、心の中で本人を責めているのだらうと思う。そこを何とかしたいけれど届かないので苦しい。また、姉2人との関係はどのようにしておいたらいいのかと悩む。ニート・ひきこもり対策をもっと具体化し、社会保障もあってもよいのではないかと思う。病院に行かないと障害者年金も生活保護も受けにくい。
- 子どもに強迫症状があるが「これはくせや」と言って病院へ行ってくれない。その行動や音にストレスを感じてしまい、私は体調が悪くなるばかりで、この先、子どもも私もどうなるんだろうと不安で一杯である。
- 小学校内に教室以外の居場所を作ってほしい。スクールカウンセラーを週1回以上配置できるように、雇用日数や人員を増やしてほしい。必要な時にサポートに入ってもらえるように、支援級や支援の先生を増やして余裕をもたせてほしい。ルポに小学生も通いやすいような工夫をしてほしい。フリースクールなどの民間施設を利用する場合の費用助成制度を創設してほしい。相談先が一目でわかる不登校ガイドブック（枚方版）を作ってほしい。最近、学校に行かないという選択も認めているが、以前の学校からの指導に辛く悲しい思いをした。学校の立場もあると思うが親の思いを受け止め共感し、導いてくれるような助言をお願いしたい。
- 子どもは自立したい気持ちが強い反面、他に頼ることができないジレンマで悩んでいるように見える。

- 子どもは不登校になった頃は、世の中に対する不信感が強く、生きていく価値が見いだせなかったが、相談機関につながることができ、学校や友だちの理解も得ることができて、徐々に不信感もとけていき元気になることができた。今は3児の母として幸せに暮らしている。
- 家族会の活動をすることで、子どもとの適切な距離が保てるようになり、ひきこもりであることが気にならなくなった。また、家の中で自然に接することができるようになり、本人を十分に見守れた。社会資源を利用してもすぐに途切れてしまったので、そんなときのフォローが引き続き欲しかった。支援の質の向上と子どもの特性に応じた支援がほしい。教育と福祉のつながりを密にしたら、早期に良好な状態になると思う。
- 警察、市役所、保健センター、病院など、あらゆる関係機関の連携を強く希望する。危険な状態だったので、警察に相談していたが、3回目以降は市役所に相談するように言われ、がっかりした。
- 不登校やひきこもりが増加している。不登校に関してはSC、SSWの配置による不登校対策もされている中での増加であり、学校そのものが子どもたちにとっての心地良い学びの場ではなくなっているのかもしれない。ひきこもりにおいても長期化していることも課題と思える。特に7040、8050問題は今後も本人・家族を苦める大きな課題である。行政や民間団体の支援は有効ではあるが、今後も運営が継続できるのか、マンパワー・財源的には不安であり、その支援自体も個別・家族支援が中心となる。確かに支援により救われる本人・家族もあるが、絶対的少数である。そして、ひきこもりから脱出してもその人が人生の主人公として生きていくには、ひきこもっていた時間の損失は現実的には大きい。支援活動が継続的にできること、生き直しができる社会環境になってほしいと願うことは理想かもしれないが、多く人々の理解があってはじめて実現に向かうことなので、不登校・ひきこもりに限らず弱い立場の人々が受けとれる社会になってほしいし、聴く耳を持つ人でありたいし、その様な人々が増えてほしい。
- 家族会で、ひきこもり外来のあるクリニックを紹介され、親だけの面談ののち、本人が受診している。はじめて本人が安心して話せる人が見つかったと安心している。そのクリニックはスタッフが本人の「居場所」まで一度来てくださり、1年以上かけて、本人の直接受診につなげてくださり感謝している。現在、本人と父親で広い農園での活動をほぼ毎日している。父親が動けなくなっても、継続できる仕組みを、何とかつくっていききたい。これからのことが心配で、親亡きあと、社会から孤立しないように、人との関係をつくっていききたい。
- 親亡き後、子どもが自力で生活できるのか不安。何でもいいので、仕事をしてみて、働く経験をしてほしい。